

# MRUの思い出

—— 岩永知勝氏談話聞書 ——

高 杉 志 緒

## Looking Back at the MRU

—— A Verbatim Account of Dr. Tomokatsu Iwanaga ——

by

Shio Takasugi

### Abstract

In the summer of 2008, Dr. Tomokatsu Iwanaga (born 1921 and residing in Fukuoka City's East Ward), spoke on his work in Japan's post-war repatriation effort in Korea and the Medical Relief Union ("MRU"). I hope repatriation history can be passed on to future generations through his account.

I (T. Iwanaga) was born in Japan. At age five, my family moved to Korea as my father became Vice Director of Incheon Hospital.

After elementary school in Incheon, I entered Seoul Middle School, and studied at Seoul Imperial University's Medical School. There, I joined the Ice Hockey Department, and Professor Y. Imamura's Swimming Department where I met K. Oogida, a year my senior, and classmates S. Miura and H. Souma.

Miura, Souma and I joined the "Mongolia Research Unit" of the University's "Scientific Research Institute of Continental National Resources", largely because Mr. Imamura headed the institute. Besides Mr. Imamura, Associate Professors Masashi Tanaka and Seiichi Izumi also joined our unit. The three worked for the post-war repatriation effort, including the MRU.

To rescue the Japanese fleeing from North Korea who flocked to Seoul after the war, the "Students From Japan" was created around Hiroaki Yokomizo, from the Medical School. On October 1<sup>st</sup>, we created the "Student Unit" from the "Association Assisting the Japanese in Seoul". On October 11<sup>th</sup>, the MRU was created from the "Medical Relief Squad" and the "Military Base Medical Relief Squad". We assisted the "Military Base Medical Relief Squad" in Seoul until early December.

In December, we assisted Mr. Imamura's "Medical Relief Squad", as we headed home to Hakata from Seoul. On February 2, 1946, the Medical Relief Department of the Association to Assist the Japanese Living Abroad was created in Shofukuji Temple in Hakata under Mr. Imamura, Mr. Tanaka in charge of General Affairs and Mr. Izumi, Accounting. We had a sense of hope and a mission that we had to create a bright new future for Japan.

After 63 years, it all seems like a distant past. I can't say enough on how much the repatriates suffered. I just don't want it forgotten that Japan today is the result of the blood, sweat and toil of all of us. (Translated by David Kalischer)

キーワード：MRU (Medical Relief Union)、引揚援護、博多港、京城帝国大学、内地人学徒団、財団法人在外同胞援護会救療部、聖福寺診療所、在外同胞救出学生同盟

## 1. はじめに

第二次世界大戦後、昭和20年11月22日付勅令第651号により地方引揚援護局官制公布が行われ、同月24日、下関、博多に「厚生省引揚援護局」が開局、博多の出張所として門司出張所が新設された(博多引揚援護局『局史』)。但し3港中、実際に「引揚者受入」を行ったのは博多引揚援護局のみであった(『援護50年史』)。博多港は約1年5ヶ月に亘り、朝鮮半島や中国東北地区などから約139万人の日本人引揚者を迎え入れ、同時に在日の朝鮮半島や中国の人々等、約50万人を故国に送り出す「海の玄関口」となった。

下関港は明治16年、門司港と博多港は明治22年に特別輸出港に指定され、3港共に国際貿易港としての歴史を持つ。だが、下関港、門司港がいわゆる「引揚港」とならなかったのは、「完全に航路の安全を保証できなかったことにある」(『引揚援護の記録』66頁)。関門海峡は同年3月末から終戦まで米軍に多数の機雷を投下され、門司海軍武官府が取り扱った触雷艦船が大小155隻に達していた(「掃海完了は明春」『西日本新聞』昭和20年10月17日)。63年が過ぎた平成20年10月9日、下関市の満珠島の南約1.5kmで米軍が投下したとみられる機雷の不発弾1個が海上自衛隊下関基地隊によって水中で爆破処理されたことは(「機雷の不発弾 水中で爆破処理」『毎日新聞』平成20年10月10日下関版)、我々の記憶に新しい。大戦被害の甚大さが窺えよう。

筆者は以前、博多港引揚に関して2名に聞きを行った経緯がある。戦後60年が過ぎ、体験を次代に伝えていくことが問題となっているためである。1人目は、「引揚げ港・博多港を考える集い」会員で、後世に引揚体験を伝えていく活動を行っておられる森下昭子氏である。「辛い過去は思い出したくない」という体験者もおられる中、森下氏からは朝鮮半島から博多

港に上陸したご自身やご家族の引揚体験を伺った（「ある引揚体験—森下昭子氏からの聞き取り」『西日本文化』404号、西日本文化協会、平成16年8月）。2人目は、内山和子氏からである。内山氏からは、博多区にあった引揚孤児収容所「聖福寮」でボランティアを行った時の孤児たちとの思い出、即ち博多における引揚援護の一端を伺うことができた（「引揚孤児と暮らした 福岡・聖福寮の思い出」前掲『西日本文化』422号、平成18年8月）。

そして平成20年夏、筆者は森下昭子氏の紹介によって、岩永知勝氏（大正10年生、福岡市東区在住）に話を伺うことができた。

岩永氏は戦前、朝鮮半島で生活し、昭和20年12月博多港上陸。終戦直後から朝鮮半島



写真1 岩永知勝氏近影  
（平成20年10月岩永内科医院にて撮影）

で引揚援護に携わり、「移動医療局」（米軍公認名称 Medical Relief Union 以下略称MRU）の業務に携わった経験を持つ。本稿が、岩永氏個人の体験談話を通じて、地域の歴史を後世に伝える一助となれば幸いである。

次章では、引揚者の体験が綴られた平和祈念事業特別基金編集・発行『平和の礎 海外引揚者が語り継ぐ労苦』（平成3年以降毎年発行、平成20年10月現在全18冊）で報告されている3区分（1 海外移住の動機と家族状況、2 終戦直前・直後の生活の変化、3 引揚げ及び生活安定までの労苦）を参考に、談話を整理して紹介する。尚、以下の文中における敬称はできるだけ省略し、初出人物名に続く括弧内には最終職歴等、故人の場合は没年（没年が不正確の場合「故人」）を記した。また、地名等は当時の呼称で記した。今日の視点では民族問題上、不適当な表現も含まれるが、当時の考え方を伝えることを重視したためである。予めご了解頂きたい。

## 2. 岩永知勝氏談話

本章では、情報の錯綜を防ぐため、先に述べたように岩永知勝氏の談話を時系列に沿って、『平和の礎 海外引揚者が語り継ぐ労苦』による3区分（1 海外移住の動機と家族状況、2 終戦直前・直後の生活の変化、3 引揚げ及び生活安定までの労苦）に整理して紹介する。従って以下（2・1～2・3）における文中の「私」は、岩永知勝氏の一人称として使用した。

### 2・1 海外移住の動機と家族状況

私（岩永知勝）は、父計七、<sup>けいしち</sup>（佐賀県杵島郡白石町出身、享年87歳）、母のぶ（佐賀県藤津郡嬉野町出身、享年57歳）の長男として日本で生まれた。私が5歳の頃、父が朝鮮半島の京

畿道仁川府立病院に副院長（眼科医）として赴任したため、家族で朝鮮半島に移住することになった。以来、終戦・引揚を迎えるまで家族の本拠地は仁川となり、父は昭和4年頃府立病院を退職して同地で開院した。

私は地元であった仁川のちゅうげん 峴国民小学校に通った後、中学校から京城（現ソウル）へ片道1時間の汽車通学をした。京城中学校から、京城帝国大学予科（3年制）に進学したためである。

予科後半から京城市内に下宿し医学部に進学した。医学部同級生には後日、引揚援護活動を共に行った三浦省二（門司鉄道病院長、平成6年没）、相馬廣明（東京医科歯科大学名誉教授）がいた。

京城帝大時代の部活動は、夏は水泳部員、冬はアイスホッケー部員として汗を流した。水泳と水球は中学から行っていたが、ホッケーは冬、校庭での活動を観戦していたところ声が掛かった。京城の冬は-20℃まで冷え込む。校庭に水を捲



写真2 京城帝国大学アイスホッケー部集合写真  
（『写真集 城大75周年』より転載、昭和17年撮影、向かって左から3人目が岩永氏）

いておけばすぐに凍ってしまうので手軽に楽しめる冬季スポーツだった。3年生の時には、「五帝大戦」という5つの帝国大学（北海道、東北、東京、京都、京城）が集う大会出場のため、本州長野県の松原湖へ道具を担いで出掛けた思い出がある。

力点を置いていた水泳部は、今村豊教授（伊賀上野精神病院院長、昭和46年没）が部長であり、1年先輩の扇田和年（浜の町病院内科医長をへて福岡市にて開業）と共に部活動をした。水泳部は競泳だけでなく、希望者が集まって水球の活動も行っていた。少し遡るが、私と水球との出会いは予科の時だった。水球は6人で行うが、左利きの私はチームで重宝され、センターフォワードを務めた。予科2年の時には、西部インターハイが九州帝国大学農学部のプールで行われたため、旧制高等学校（第五高校、第七高校、福岡高校、山口高校、京城帝大予科）が集まった。大学に進学すると戦局が厳しくなってきたため、地区大会は中止。全国大会が東京の第一高校で開催されたので、自分はキャプテンとして皆と一緒に上京した思い出がある。その折には水泳自由形の代表として東京神宮のプールでも泳いだが、楽しかったのは水球である。球技にはチームプレーの醍醐味がある。

京城帝国大学医学部に在籍し、同級生と出会い、水泳部で活動したことが私の運命を決めたといっても良いだろう。

## 2・2 終戦直前・直後の生活の変化

私の終戦直前・直後の生活を語る時、先に述べた京城帝国大学水泳部に所属していた個人的

境遇だけでなく、同大学の「大陸資源科学研究所」の存在について語らねばならない。

京城帝国大学には、終戦間際の昭和20年6月、泉靖一助教授（東京大学東洋文化研究所元所長、昭和45年没）の進言により「大陸資源科学研究所」が新設された。これは満州事変後の昭和8年、法文、医学部の教官が中心となって発足した「満蒙文化研究会」が元になっているそうだ（藤本秀夫『泉靖一伝』191頁）。この研究会の柱は三つあり、古代史・考古学、社会学・民族学（以上法文学部）、形質人類学・衛生学（医学部）の調査研究であった。この二つ目の柱を担っていたのが泉助教授であり、三つ目の医学部の柱を担っていたのが水泳部部長の今村豊教授で同研究所所長も務めた。また、衛生学の方面では、田中正四助教授（広島県環境衛生センター所長、昭和54年没）が活躍されていた。この3人が終戦後、MRUを含めた博多港での引揚援護の一翼を担ったことを考えた時、活動の萌芽は戦前にあったといえよう。

私も期せずしてその流れに乗ることになった。何故なら、今村教授と泉助教授は昭和20年7月3日夜、「蒙疆調査隊」を組織して奥蒙古のオールドス地域に向けて出発したが、今村教授の命で、夏休みを迎えていた私達医学部学生も隊員として参加したためである。

同級生の三浦、相馬も一緒だった。私は、泉助教授の弟（靖二）と京城中学校で同級生でもあったから、靖一助教授のことも存じ上げていたので調査隊参加に違和感はなかった。だが、今考えると、終戦直前によくぞ調査に行ったと思う。トラック2台で農村を調査し、8月7日北京着。張家口に着いたのは13日頃だった。張家口には、大東亜省が補助金を出して設立した蒙古善隣協会「西北研究所」もあったため挨拶に行った。しかし、9日には既にソ連軍が参戦を始めていた。私達は撤退をはじめた日本兵に出会い「負けるぞ、帰れ」と言われた。国境地帯である同地は戦場と化し、調査どころではない。すぐに移動して北京に1泊。奉天（現瀋陽）に着いた時、泉助教授は我々学生に対して「そのまま帰りなさい」と配慮して下さり、無蓋貨車に乗った。従って敗戦は汽車の中で知った。三浦は「三十八度線のすぐ南にある開城駅のプラットホームで駅員からの号外」によると記憶している（木村秀明『ある戦後史の序章』10頁）。8月15日夕刻、京城着。私は同日、仁川の自宅に着いた。尚、三浦の手記には「八月二十三日、今村教授と泉先輩が北支から帰ってこられた」（前掲『ある戦後史の序章』12頁）とあるが、京城にいた田中正四助教授の8月16日付日記には「泉が昨夜帰ってきたのでいってみる」（前掲『泉靖一伝』194頁）とあり、一見齟齬する。だが、23日、つまり北緯38度線封鎖直前に同級生の相馬と共に京城に戻ってこられた印象が強いので、泉助教授は15日一旦京城へ戻ったものの、残留組を迎えるために往復されたのかもしれない。

とにかく終戦日翌日から「敗戦国民」として朝鮮半島での生活が始まった。今や我々は「外国人」となり、ラジオ放送も朝鮮語（韓国語）に一変した。京城は白い服を着て堂々と歩く戦勝国民である朝鮮半島の人々とは対照的に、北部朝鮮半島から脱出した日本人の姿が増えてくるようになった。その数について「8月25日に38度線で南北朝鮮が分断されるまでの僅か十

日間に、戦災避難民を含めて推定約七万人の日本人が、北朝鮮や満州から南下したといわれている」という記載もある（前掲『ある戦後史の序章』16頁）。京都市内の旧国民小学校等の施設はたちまち収容所となり、すぐに避難民で溢れた。壮年男子の大半は兵役についていたため、避難して来る者の中心は老人、婦女子、子ども達である。人々は着のみ着のままでも栄養状態も悪かった。避難途中で体験した恐怖感を抱え、疲れ切っていた。

この状況を少しでも何とかしようと医学部同級生で総代の横溝公明（北九州病院元医長）が、リーダーとなって結成されたのが「内地人学徒団」だった。前掲『ある戦後史の序章』では学徒団に同級生であった「石田一郎、金川一彦」といった名も記載されているが（17頁）、2人とも戦後は京都大学に転学したので、自分の記憶にはあまり残っていない。今日でも印象が強いのは、リーダーの横溝以外では、水泳部でも一緒だった扇田先輩、同級生の三浦、部は違うが一級下の大村裕（九州大学医学部名誉教授）といった面々である。扇田先輩は、医師免許を取得後、一旦応召されていたが、8月7日には京城大の医局に復帰。横溝の呼び掛けで学徒団に参加し、患者の診療にあたってくれた。9月中旬頃、扇田先輩が同級生のつてを頼って旭町の小林病院を借用することに成功し、活動の拠点とすることができた。罹災者の患者には栄養失調症が多く、発疹チフス等、伝染病の蔓延にも配慮しなければならなかった。我々後輩は、医師免許を取得していないので諸施設からの病院への患者搬送や、治療に必要な物資を調達し、交代で小林病院に寝泊まりする日々であった。

立ち上がったのは学生だけではなかった。我々日本人にとって朝鮮半島は無政府状態となったからである。そこで京城在住者が中心となって在野団体「京城日本人世話会」が結成され、9月2日には引揚者のための「京城内地人世話会会報」が発刊された（発刊日は福岡市『博多港引揚資料目録』による）。

9月4日、博多釜山連絡航路が再開され、いよいよ引揚が本格化した。京城からの引揚は、通常、釜山まで列車移動後、釜山港から博多へ上陸するのが一般的であった。私の家族も10月頃、仁川から釜山まで列車で移動し、釜山港から乗船した。仁川にも港があったが、米軍の軍艦が入り出ており、山中に退蔵物資があるという噂だった。家族（両親と妹2人、弟2人）は、日本が米軍から借用した舟艇（引揚船）に乗ることができ、博多港に上陸後、故郷佐賀で生活を始めた。

私は同級生と共に京城に残り、患者の病院輸送、薬品等物資調達等の引揚援護活動を続けた。邦人引揚が進行すると日本人医療機関は減少し、38度線以北からの引揚者は増加した。後になって京城に到着する人々程、困窮の度合いやダメージが酷くなり、目を覆いたくなる程だった。米軍が進駐し戒厳令が敷かれ、夜10以降は外出禁止となり、時折銃声が響く緊張状態だった。その中を夜間、扇田先輩は診療に出かけたこともあったようだ。

学生が中心となって始めた病人援護活動であったが、京城帝国大学教官達も黙って見ていた

わけではない。京城内地人世話会の会員であり京城帝国大学総長でもあった山家信次は、9月中旬、医学部とも交流があった泉靖一を世話会事務所に呼び出し「一貫した診療と衛生管理の組織をつくってくれないか」と依頼した（前掲『泉靖一伝』201頁）。

その後、今村教授、田中助教授、京城帝国大学付属病院長北村精一教授（国立静岡病院院長、昭和55年没）が相談し、10月1日、京城日本人世話会は新体制を整えた。つまり、我々学生が拠点としていた小林病院を「罹災救済病院」とし、北村教授を院長、須江奎次郎助教授（自衛隊中央病院医務課長、故人）を副院長、田中助教授を庶務課長に据え、我々学生達は「学生班」として組織下に入った。横溝班長を中心に「京城日本人世話会」の一部となって活動を続けたのである。

京城での医療活動は確固となったが、患者をいかに安全に日本へ移動させるかという問題が残っていた。釜山への引揚列車は増発されたが、博多までの船中診療を含めた一貫した援護、つまり「移動医療班」と「基地医療班」を組織する必要があったのである。この発案者は泉助教授であったことが、田中助教授の日記に記されている（前掲『泉靖一伝』202頁）。生前の泉助教授を知る者であれば、誰もが「やっぱり」と頷くことであろう。新しい組織を考える能力と抜群の行動力に周囲は皆、舌を巻いていたからである。

「移動医療班」「基地医療班」から成る組織発足の発案は日本人世話会の討議を経て、米軍政庁テラー防疫課長に鈴木清教授（大阪女子短期大学学長、故人）が提言。10月11日に移動医療局（MRU）が発足し、局長はMRUの名付け親である鈴木教授が務めた。こうして移動中の患者救護「移動医療班」と、釜山及び上陸地博多に「基地医療班」を待機させ、有機的に活動を行う組織MRUの礎が築かれたのである。

その頃、「基地医療班」を担う京城罹災病院も強化された。引揚者の増加に伴い患者が増えたため、ベッド数約20床の旧小林病院だけでは手狭となっていた。そこで10月上旬には京城市内の渡辺病院、安田病院等も使用し、各施設への巡回医療も強化した。また10月29日、京城日本人世話会でも「医療部」と「援護部」を置き、北村教授が医療部長、須江助教授が救済病院長に就任した。

### 2・3 引揚げ及び生活安定までの労苦

京城の状況は、12月に入ると北緯38度線以南からの引揚者もひと段落した。38度以北の人々は、冬季の極寒で移動できない。越冬後に引揚を行う可能性が高かった。

京城大学関係者は、米軍任命の大学総長から11月解職されて以降、引揚の順番を待っていた（前掲『泉靖一伝』203頁）。罹災民救済病院には12月8日に順番が来た。泉助教授は12月中旬に引揚を行うことになり、10月末に京城に戻った山本良健（戦前は全羅北道立群山病院小児科医長、聖福寮寮長を経て福岡市にて開業、平成5年没）を含めた一部の医師は、京城

の罹災病院に暫く残ることになった。

私は学生班員として「基地医療班」の手伝いをしながら12月初めまで京城にいたが、今村教授は「学生を早く学校に戻さないといけないね」と心配しておられた。私達同級生は、本来であれば昭和20年9月に卒業する筈であったが（戦時のため3年半で繰り上げ卒業）、京城帝国大学は既がない。援護活動もあって転学が日延べになっていることを気にしておられたのである。京城帝国大学の在学証明書等、転学に必要な書類は今村教授が揃えて下さったことを覚えていてる。

こうして12月、我々学生は今村教授が隊長を務めた移動医療班の補助をしながら京城から引揚を行うことになった。釜山まで病院列車に乗り、患者の乗る病院船に同乗して患者の引揚援護をしながら博多に上陸したのである。病院列車は、12月6日を第一陣として、12月19日、昭和21年1月23日、2月5日と連続して仕立てられた（前掲『ある戦後史の序章』42頁）。福岡市『博多港引揚資料目録』をみると『京城日本人世話会々報 第七十七号』（昭和20年12月5日発行）には「患者列車は六日出発病院船で七日博多へ」という記事が掲載されているから、我々が乗ったのはその列車だったと思う。

博多上陸後、私の生活がすぐに安定した訳ではない。昭和21年4月から九州大学に通うため転入試験を受験したが、転学前に密航を体験したことが思い出される。昭和21年の1月頃だろうか、博多から釜山に戻る船底に隠れて朝鮮半島に上陸した。MRUでの用事は何であったのか今では思い出せない。乗船前に日本人から船底に隠れる場所を指定され、上陸時にも別の日本人が取り次いでくれたところをみると泉助教授が手配したと察せられる。

このようにMRUは昭和20年内に京城・釜山・博多までの輸送ルートを確立し、釜山でも宮下義正（京城帝国大学医学部6回生）が支部長となり活躍していた。かたや上陸地博多に対して泉助教授は「博多に拠点を作るべく引き揚げてきたものの地盤もなく手持ち資金も苦しくなった」（山本良健「京城帝国大学引揚げ医療の足跡」）。そこで泉助教授は再び一計を案じ、外務省・内務省の認可団体「社団法人在外同胞援護会」（昭和20年10月設立）に掛け合い、我々の活動を団体の一部として認めて貰うことに成功。京城の救済病院、MRUを含めた全組織を「救療部」として再組織することとなった。

こうして昭和21年2月2日「財団法人在外同胞援護会救療部」が誕生した。部長に今村教授、庶務課長に田中助教授、会計課長に泉助教授が就任。本部の場所については後に触れるが、博多の御供所町にある聖福寺境内であった。海外では京城・釜山・胡盧島（中国遼寧省）に支部を置き、引揚船中には船医が同乗、国内では仙崎・佐世保・広島・舞鶴に出張所を設けて埠頭業務の援助、検疫所等における伝染病予防業務等を実施することになった。これで国内外の引揚者医療や患者輸送が組織的に行えるようになったのである。事実、「昭和21年1月17日作成」の『在外同胞援護会現況及計画概要』をみると、「在外同胞援護会医療部設置」の項目



中、「人事」には「医療部長 元京城帝国大学教授 今村豊」が筆頭に挙がり、末尾には「学生 三浦省二 外十九名」とある。我々学生も救療部の一員として本部からも正式に認められていたことが窺えよう。

一方、この救療部誕生の裏には博多で既に活動していた緒方龍院長（戦前は清津日赤病院長。浜の町病院長、昭和30年没）の尽力があったことを忘れてはならないだろう。緒方院長は、朝鮮半島北端に位置する咸鏡北道の清津から昭和20年9月初旬に出発し、同月26日博多上陸。日赤本社と連絡をとり「清津日赤臨時救護所」として博多の御供所町にある東長寺で引揚援護を行っていた（前掲『ある戦後史の序章』63～64頁）。東長寺は博多の古刹で、開祖が空海という寺伝を持つ真言宗九州教団の本山である。

他方、今村教授と緒方院長は共に京都大学医学部出身の同級生であり、戦前から親交が深かった。そこで今村教授が博多に来てから、緒方院長は日赤とMRUで共同医療を行うようになった。立場を考えれば緒方院長は、今村教授と日赤との板挟みだった筈である。実際、緒方ユキ夫人が『千早病院二十五年史』によせた手記によると「このとき緒方としては、日赤か在外同胞援護会かの何れかを決めなければならなかったのです。（中略）結局は友情が勝ちを占め、日赤に辞表を出しました」（前掲『ある戦後史の序章』65頁）という文章にその心労が裏付けられるだろう。活動拠点も東長寺から同じ御供所町にある聖福寺に移動した。聖福寺は鎌倉期、栄西が開いた臨済宗妙心寺派の古刹であるが、緒方院長は檀家であり寺側の信望もあった。従って、緒方院長や聖福寺の好意によって、今村教授が部長を勤める救療部の本部を置くことができたのである。

本部だけではない。救療部が設置された同日、聖福寺境内に「博多診療所」も開所された。これら聖福寺内の施設について『財団法人在外同胞援護會事業誌』には「引揚港中最大のものであると同時に、満州、北鮮関係の主要上陸地と予想されたので、救療部の本部を置き、診療所にも最も有力な人員を配して日本に於ける当部の積極的活動地とした」（53頁）と記述されている。確かに救療部本部及び診療所の設置は、引揚港博多の重要性が公に認められたためであろう。しかし、その陰には先に述べた京城で行ってきた我々の活動を基にした泉助教授の在外同胞援護会への説得や、今村教授と緒方院長の友情があったことを忘れてはならないと思う。

診療所は庶務課（庶務係、会計係）、診療所（内科、外科、小児科、皮膚泌尿科、耳鼻咽喉科、産科婦人科、病理試験室）、埠頭班（「日本人診療班」「朝鮮人診療班」「船医班」「収容所診療班」）から成る総合的な救護医療施設である。博多診療所は「聖福寺診療所」と名づけられ、緒方龍院長、須江李次郎副院長という顔ぶれで運営された。

翌月の昭和21年3月25日、救療部の一環として二日市療養所が開所された。二日市では引揚時に被害を受けた女性達の治療を行っていた。この活動については、上坪隆『水子の譜』（現代史出版会、昭和54年）、引揚げ港・博多を考える集い編・発行『戦後50年引揚げを憶う

(続) 『証言・二日市保養所』(平成10年)といった書に詳しいが、私はこの活動に参加していない。

こうして私は、同級生の横溝、三浦、一級下の大村といった仲間と共に引揚援護を手伝いながら聖福寺境内でしばし暮らした。この間における彼らの活躍は、『ある戦後史の序章』中の「乗船援護と密航」という項に詳しい(71～81頁)。私は博多埠頭に行って、援護活動の手伝いや物資輸送の手伝いをした覚えはあるが、本格的な乗船援護の記憶はない。

引揚後から復学前までに思い出せるのは、「在外父兄救出学生同盟」(昭和20年11月17日結成、翌年7月「在外同胞救出学生同盟」と改名、昭和22年2月解散)の学生達が東京から博多に来たのを迎えたことだろうか。毎日新聞社編『在外父兄救出学生同盟』の巻末年表によると「昭和21年3月3日第二回九州遊説隊派遣」と記された事項が該当しよう。派遣の顔ぶれについて同書「九州大遊説」の項では、東京帝国大学の学生藤本照男委員長をはじめ、「吉田、土生(東大)、原、南方、春口(拓大)、今井、竹下(早大)、海老原・中本(法大)の十人」と記している。活動については、「九州学生連盟発会式」(於九州帝国大学)における遊説によって「連盟」という名称を入れない「九州学生同盟」として発足したこと、博多埠頭で援護活動の補助や、街頭演説会等を行ったことが記される(前掲『在外父兄救出学生同盟』78～84頁)。



写真3 東京から来た「在外父兄救出学生同盟」学生との集合写真  
(岩永知勝氏蔵、昭和21年3月博多にて撮影、前から2列目向かって左端が岩永氏)

私の手元にある1枚の集合写真は、東京から来た「在外同胞救出学生同盟」の学生達と博多の料理屋で撮影したものである。写真を見ると、往時の博多闇市での喧噪も思い出される。残念なことに今となっては全員の名前と顔が一致しない。写真の裏に書いておけばよかったと悔やまれる。はっきり覚えているのは、東京から来た学生では、仁川の国民小学校で同級生だった原稔（拓殖大学学生、後ろから2列目後述する九州大学学生高岸直人の手前）、委員長であった藤本照男（東京大学学生、最前列右から2人目左手に煙草を持つ人物）。九州大学学生では、竹田（法文学部在籍、最後列左から2人目）、医学部では高岸直人（昭和21年卒、最後列左から5人目）、古川宰（昭和21年卒、最前列右から3人目藤本照男の左横）、平野桂樹（昭和22年卒、最後列右から4人目）といった人物しか思い出せない。その頃はまだ大勢の邦人（親類、兄弟、同級生、友人達）が中国大陸や朝鮮半島に残されている状況だった。物資は乏しく日本の各地には焼け野原が広がっていたが、我々学生達が中心となって新生日本、明るい未来を切り開かねばならないという希望と使命感があった。昭和21年3月といえば配給もままならない頃。写真は貴重だったが、この1枚には当時の学生達の熱情が詰まっている。

昭和21年4月、私は聖福寺境内で過ごしながら九州大学に転学し、同年9月に卒業。その前月8月15日、泉助教授の奔走で境内に引揚孤児の為の施設「聖福寮」（山本良健寮長）が設立されたが、私は一時、三浦とその2階で生活した。学校の合間には、援護活動を手伝っていたと記憶している。

卒業後、私は嬉野海軍病院（昭和20年12月「国立嬉野病院」と改称）に三浦と共にインターンとして2年間勤務。その後、九州電力病院、伊万里市民病院に勤めた後、博多区に開業した。

妻のことを話すことを忘れていた。私の妻、邦歌（旧姓山崎）は、姉の山崎邦栄（昭和55年没）と共に聖福寮が開設された当初から引揚孤児達の世話を手伝っていた。だから仲人は聖福寮の山本寮長である。私達は昭和26年に結婚した。私が昭和21年のひと時、聖福寮の2階に住んでいたこと、遡ればMRU、京城帝国大学の医学部・水泳部に所属したことが縁と言えなくもなからう。こうして戦後、私の生活は安定していった。

あれから63年、全てが遠い出来事となってしまい、同級生も鬼籍に入っている者が増えた。先日も国文学研究資料館の研究者が、MRUの事について調査に来た。私自身、30年前だったらもっと覚えていたこともあった筈だが、今となってはもう遅い。引揚者達、そして故郷に着く途中、中国大陸や朝鮮半島で命を落とした人々の戦後の労苦は語り尽くせない。多数の血や汗の上に今日の日本があることを忘れないで欲しい。

### 3. むすびにかえて

本稿は、2章「岩永知勝氏談話」を中核に据え、朝鮮半島からの引揚者であると同時に、引

揚援護活動も行った岩永知勝氏の談話を整理して報告を行った。

今回の聞書によって、筆者が確認できた事柄は以下の2点に大別されよう。

1点目は、MRU活動が「財団法人在外同胞援護会救療部」設置に結びついた経緯についてである。この背景には戦前の人的交流、特に京城帝国大学時代の活動（医学部内交流、「大陸資源科学研究所」における学部間交流、水球部等における学生間交流）が基盤となっていることが、岩永氏の談話によって具体的に示された。

2点目は、東京に本部があった「在外同胞救出学生同盟」と九州（博多）との関わりについてである。前掲書『在外父兄救出学生同盟』中、「九州大遊説」という項目があるが（78～84頁）、往時の写真は掲載されていない。岩永氏所蔵の写真と談話によって、具体的に東京側、九州（博多）側、双方の参加者が確認できる結果となった。この集合写真は、昭和21年3月という戦後1年も経っていない時期に撮影されたため、「在外同胞救出学生同盟」即ち学生の引揚援護活動を知る上でも好個の資料と位置づけることができよう。

岩永氏の談話と共に筆者の心を動かしたのは、この写真に記録された青年達の笑顔である。どの顔も「敗戦国民」という言葉が持つ陰鬱なイメージには遠く、使命感に燃えた活気ある笑顔を浮かべている。引揚者、援護者、双方を問わず「多数の血や汗の上に今日の日本があること」を忘れぬよう、今日の私達に語りかけている姿にみえてならないのである。

## 謝辞

本稿作成にあたって、聞書を快諾頂き資料を提供して下さいました岩永知勝氏、岩永氏を紹介して下さいました森下昭子氏（引き揚げ港・博多を考える集い会員）、写真掲載をご許可頂きました篠崎公一氏（「京城帝国大学・京城帝国大学予科同窓会」旧事務局）、要旨を英訳して下さいましたDavid Kalischer氏（福岡市総合図書館勤務）、ご教示頂きました鳥巢京一氏（福岡市博物館学芸員）に対して深甚の謝意を表します。

## 主要引用・参考文献（初版・初出刊行年順に掲載した）

- 1.（初版）財団法人在外同胞援護会編集：在外同胞援護会現況及計畫概要，財団法人在外同胞援護会，昭和21年1月17日作成，（再版）加藤聖文監修・編集：「国内引揚関係諸資料」，ゆまに書房，東京，pp.124-141，平成14年
- 2.（初版）財団法人在外同胞援護会事業誌編纂委員会編集発行：財団法人在外同胞援護会事業誌，昭和22年4月，（再版）加藤聖文監修・編集：「国内引揚関係諸資料」，ゆまに書房，東京，pp.1-121，平成14年
3. 博多引揚援護局局史係：「局史」，厚生省引揚援護院，昭和22年
- 4.（初版）引揚援護廳長官官房總務課記録係編集：「引揚援護の記録」，引揚援護廳，昭和25年，（再版）厚生省編集：「引揚援護の記録」，クレス出版，平成12年
5. 毎日新聞社編集発行：「在外父兄救出学生同盟」，昭和43年

## MRUの思い出

6. 木村秀明：「ある戦後史の序章—MRU引揚医療の記録—」，西日本図書館コンサルタント協会，昭和55年
7. (初出) 山本良健：京城帝国大学引揚げ医療の足跡—城大戦後史補遺—，紺碧（107号），平成2年10月，（再録）紺碧（創立80周年記念号），pp.65-69，京城帝国大学・京城帝国大学予科同窓会事務局，川崎市，平成17年11月
8. 藤本秀夫：「泉靖一伝 アンデスから濟州島へ」，平凡社，平成6年
9. 厚生省社会・援護局援護50年史編集委員会編：「援護50年史」，ぎょうせい，平成9年
10. 京城帝国大学・京城帝国大学予科同窓会編集・発行：「写真集 城大75周年」，平成12年
11. 福岡市保健福祉局総務部地域福祉課編集発行：「博多港引揚資料目録」，平成13年
12. 独立行政法人平和祈念事業特別基金編集・発行：「平和の礎 海外引揚者が語り継ぐ労苦18」，平成20年